

小説ケモミちゃんシリーズ

うずしお丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

同人作品『ケモミちゃんの旅〜覚り少女と無垢人形〜』の外伝にあたる小説集です。

https://www.dlsite.com/home/work/||product_id/RJ258695.html

目次

メガロちゃんの憂鬱百景

父、湯川幸蔵が破顔するときにはいつも口角の上がった阿吽あうんの狛犬の顔が思い浮かぶのだが、ある日父の助手オイラーと私が馬鹿話に興じているときにふと鏡を見ると私の表情もまたそっくりであった。血というのはかくも恐ろしいものか。もしかしたら父娘（おやこ）が並んで笑っているとき、どこかの神社の入り口で立派な狛犬が一揃い揃っているみたいだと誰かに言われていたのかと思うと私は居てもたつてもいられなくなつて家を飛び出したのであった。

家出、というのは半ば冗談である。私はいま腰から藁鞆を提げて、山の麓の村を歩いているところだった。往診の時間であった。十四歳まで私は誰も立ち入らぬ山の上の施設にて育つていて、幼少期は少しだけ野山に遊んだがあの少女時代は引きこもりを貫いて過ごしていたから、ここ最近になるまで麓の村々に顔を出したことなどは一度もなかった。それが今年に入ってから、私の生活は様変わりをしてみせている。

全てのきっかけはあの少女が私たちの施設に訪ねてきたことであつた。はつと息の詰まるほどに無垢な白さのある少女。雪狐のような両耳。髪の下から覗く純真な眼。立ち居振る舞いや剣さばきは旅慣れて、同じ歳を重ねたとは思えない垢抜けた気配すら漂わせていた少女。私の嫉妬の対象だったそんな彼女の正体は、人間でも妖怪でもなく、『生きている人形』だったのだ。いま思えば私は人形に嫉妬していたのかと、諧謔かいぎやく的な思いと共に振り返るが、あれは『生きている』という意味で人間よりも人間らしかった。彼女を見ると、様々な感情が私のなかに巻き起つた。意地やプライド、私にはない自由を手にしているゆえの劣等感……そういつた直視しがたい感情の底にあつたのは、憧憬だつた。私は彼女の観察を続けた末に思った。彼女が私の亡き母に出会つたとき、父や助手のオイラーに接近したとき、旅の途中で人間たちと交わる度に親しくなつていったとき、そして私自身の運命が彼女の力によつて捻じ曲げられてしまったとき。その訪問者は、私という存在を否定しにきたのだと思つたものだ。自分の

出生の歪さにひねくれて、自らを否定し続けてきたこの私を。

その後何があつたかを具体的に回想することは割愛したいと思う。結果、私はその少女との出会いによって少し変わった。私の感情を、存在の根底ごとかき乱すあの少女を通して、私は自分自身と向き合うことができたのかもしれない。マイナスを意味していた『否定』は打ち消されて、ゼロになった。彼女が再び旅に出たあと、私は父に相談した。自分にできることのなかで、世の中と関われる方法がないかを訊いた。私は働きたいのだと語った。そして父の勧めで、麓の村の、医者をしたらどうかという話になった。そうして現在ではこの村の貴重な往診医として、こうして日々家々を回っているのであった。

「先生は……」

この仕事を始めてはや半年で、いつの間にもやら私は「先生」「子ども先生」「ちびっこナース」などと呼ばれるようになっていた。後半は私のことを舐めているので薬の調合に味覚的な手心が加わるようになっていた。

「先生はちゃんと赤身の肉を食べているのかい？　好き嫌いしてお野菜ばかりを食べているから、髪が碧色になるんだよ」

「この色は生まれつきですから」

私はいつものようにそう訂正を入れながら、お婆ちゃんに飲み薬を処方していた。老婆は手足を悪くしているが、基本的には元気で、むしろ私の心配をしてくれる。そして私の身体的特徴から私のことを異邦人だと思っている節があつて、「これはおにぎりって言うんだよ」などと言わなくても分かるようなことを教えてくれたり、新しく手に入れた電化製品の説明を求めてくる。空冷の冷蔵庫やドラム式の洗濯機がある傍で白黒のブラウン管のテレビが共存していたりするのには、旧時代の文化が歴史とは関係なく散発的に流入されるからで、まだ電気のインフラが整っていない村も地方にはある一方で、都市計画の段階が旧時代における最終レベルにほとんど追いついてしまっているモデル都市も存在していた。私達は文化も歴史も技術も芸術も、すべて裁断されてモザイクアートになってしまったような、頭のおかしくなりそうな時代に根を張って生きていた。

「食後に朝夕の二回、水と一緒に必ず飲んで下さいね」

お婆ちゃんに処方した薬は手足の痛みを和らげるもので、私が合成したものだ。鞆に入っている薬は抗生物質と漢方薬のほかに、自分で精製したものがある。これがよく効くと村で評判なのは、旧時代の製薬技術を参照しているからだ。私は、父の研究施設を自由に使えるために、村医者 of 患者の獲得競争から大きく優位に立っている。私はそこから一步先に出て、世界の医療技術の規格化を目指さないといけないだろう。どんな医者でも旧時代の技術を扱えるようにならないといけない。旧時代の医療は、地上からほとんどすべての病気を無くすことに成功していたからだ。

とはいえ私は村の人たちと向き合いたいと思う。しかし村人たちにも色々な人がいる。私が往診に行くと感じてくれる人がいて、嬉しかったり落ち着かない妙な恥ずかしさがあつたりするのだが、時には感謝の言葉だけでは足りず、説教を始めてしまう人もいる。例えばこんな人だ。

「この国で一番えらいのは天子様じゃろう。天子様は、この世のすべてのものに階を定めておられる。すべて、というのは、『神様』に対してもそうである。ところで先生は、この村に祀られている神様がどれくらい偉いのかを知つとるかな？」

と、勝手に問答を始めてしまうのはこの村の長だった。こちらが何かを言うより先に、この初老の男は鼻息を荒くして言う。

「まさしく、第三位階に相当する。要するに、たいへんに偉いというわけじゃ。この村はこうした神格のある神様に守られておる。そしてわしはこの村を束ねる長じゃ。つまりは責任ある立場であり、日々その重責に耐え忍びながら村民のことを考え、周りの村との交渉事もこなす。先生の想像も絶するような複雑精緻な物事のバランスをうまく成り立たせて、今日の村の安泰があるわけじゃ。こんな仕事は大変に器用なわしだからこそできることだといえる」

「……こちらが肝臓のお薬です。明らかに飲み過ぎ食べ過ぎですから、控えるようにして下さい。まずは、隣村との宴会は控えるように。絶対的な飲酒量をまずは減らして下さいね」

「なるほど確かに医者はい。医者は人を治す仕事じゃ。その力は村中の病人に振り向けられとる。しかしわしの仕事は、村中の『すべて』の人間に向けてなされており、その一挙一動にはより多くの命が懸っているといえる。もし仮にわしがいなかったとしたら……」

「偉いとか関係ないんです。お酒をやめて下さいね」

また、村の商家ではこんな患者がいた。

「子ども先生ッ！ あいにくいま金がねえんだ、ここはこいつで負けてくれねえか!？」

と、膝を立てた袴の隙間からこの男の金玉を覗かされた。はつとして視線を上げると、男の痛快そうなしたり顔。私は直ちに能力を発動し、彼の至宝を異空間に消し去り、その日限りで医者稼業をやめてしまおうかとも思った。

患者には歳下や同年代の少年少女もいた。彼らは私に診られるのを嫌がることもあったが、最初のちくはぐした時間や人見知りを乗り越えれば、私も気まずい問診の時間を過ごすこともなかった。最初に子供たちを緊張させるのは、私の異様や歳のせいであって、そのあとには人生経験の乏しい、私の『田舎者』のような様子が、彼らを笑わせたり、色々教えたような気持ちにさせるみたいで、いつもどこへ行っても、なかなか格好のいい医者や舞はさせてもらえなかった。子供たちのかくれんぼに付き合っていて黄昏時になり、味噌汁の匂いや犬の遠吠えや稲を狩る男たちの声が、稲穂を揺らす風に乘ってやってくる光り輝く風景を眺めていたとき、私は、このような景色をいままで知っている気でいたことに気付かされるのだった。

村の人たちは、はつきり言って面倒臭かった。いちいちおせっかいであり、話が長く、下品であり、教えたがり、陽気で、理屈が通じなかった。話に付き合っていると、時間は随分と余計なことに費やされていると感じる。朝に行けば帰りは夕暮れになっていた。

「——大変だ先生！ 助けておくれよお！」

そして私は、いつかは直面しなければならぬ出来事に、ついに立ち会う時がきていた……。



その老爺は代々続く石造りの職人で、「石爺さん」と呼ばれている。先祖の代から数えてもう百年以上も石碑や石像を作っているそうだ。村にある石像はすべて彼が作ったもので、腕が良く、村の外、都市から名前を聞きつけて官吏がやってきて彫像造りを頼まれたこともあり、とにかく一生を石工に捧げた人であったそうだ。

そんな人を私は診た。薬を処方したので、今は安静にしてすーすーと寝息を立てている。白い髭の表情の柔らかい、どこか可愛らしい愛嬌のある小柄な老人だった。私は随伴していた村人に、彼の病態を一語一語、はつきりと告げた。

「残念ながら、癌が全身に転移しています。お爺さんは、もって数週間になるでしょう……」

そう聞いて、その人は息を呑んだ。家の中で石爺さんが気を失っていたところを最初に発見した村の人だった。老人は妻とは数十年前に死に別れ、唯一の肉親である一人息子は、若い頃に都市の役人となり村を出ていた。だからいますぐ息子を都から呼び戻そうという話になった。

そんな時に、

「石爺さんやー!」

と、例の村長が一人暮らしの石爺さんの家に顔を出した。顔面蒼白で酷く慌てていたが、この老人の容態を聞きつけて来たわけではないようだった。その証拠に、医者である私ともう一人の村人の傍らで、一向に目を覚まさないまま眠りこんでいる老爺を見て酷く驚いていた。私達は村長に静かにするように促した。

「爺さんはどうした……体の具合が悪いんか……!?!」

私が病態の深刻さを話すと、村長は悄然とした。いつも陽気でないと気が済まないこの男も、このときばかりは、あつと言つて天を仰いだ。

「そうか……それは……残念なことだな……」

突然のことにショックで言葉が継げなり、そうして黙ってしまった彼に、私の隣にいた村人は助け舟を出す。

「何か用事があったのでは?」

「ああ、そうじゃ、そうじゃった……実はな、」

と、思い出したように村長は癖で口髭を触りながら、自分の落ち着きを取り戻そうとしていた。要件を語る。私たちに向かつて語り出したのは、石爺さん自身に用事があったというより、最初に彼に報告しなければと思つてここに来たためであつた。彼はこの小さな村に、一つの事件が起きたことを私たちに話し始める。結局のところ彼は村に起こつたこの事件を誰かと共有したかつたのだつた。

「この村の祭において象徴的な役目を持つ神社の狛犬のうちの一体が、いつの間にかぽかんとどこかに消えてしまった、という訳なんじゃ——」

◇ ◇ ◇

問題の神社の前に私は村長と来ている。本来なら阿形あの狛犬と吽形うんの狛犬が二体で一对となつているのだが、吽形の反対側のほうは台座だけ残されて狛犬があつたであろう場所が凹んでおり、跡形もなかった。

試しに吽形の狛犬を持ち上げたり動かそうとしてみるのだが、びくともしない。足元が台座にすっかりとくつついているというより、台座も石の一部であつて、切り離すには何か石工道具が必要そうだつた。そういった道具で、いまは無き阿形の方の台座に確かに切り付けられたようなぎざぎざした跡があつて、私は指の腹でそこを撫でていた。

「わしらの村では、祭のあと、皆がこの神社の前に集まるんじゃ。そうして御神酒を狛犬に飲んでもらう。狛犬がたらふく酒を飲めるように、口から喉を通つて腹の中までが空洞になつておるんじゃ。そんな風に充満じゆうみつした石をくり抜ける技術を持つているのは、この村を出て周辺を探したとしても、石爺一人しかおらんじゃろう」

村長は毎年の祭の盛り上がりを思い返しては、狛犬が消えてしまつたことを悔やむように言う。狛犬の阿形は口を「あ」の形に開けて笑つていて、吽形は「うん」の形に閉じて笑つている、想像上の神の守護聖獣だ。しかし今では吽形の狛犬しか残されていない。吽形の方は口を頬の奥まで引き結んでぴつたりと閉じ、空洞はおろか隙間

さえ見えなかった。祭の日にはあんぐりと開いた阿形の狛犬の口の中に、村人たちが大きな盃を傾けて御神酒を流し込む豪快な場面を想像した。そう思うとハレの日に酒も飲めず、今もこうして一人で取り残されてしまった狛形の狛犬が可愛そうに思えてきた。

「許せん、わしの村の神になんて罰当たりなことをする。犯人は村の神がどれくらい偉いのか分かっておるのだろうか」

「第三位階じゃ」と村長の真似を試みる。

「その通りじゃ」

村長は何故か嬉しそうなので失敗したと思った。

私は残された狛形の狛犬を改めて見上げる。取り残されたからといってその表情に陰りはなく、にんまりと耳まで裂けるほどの笑顔を見せている。燃えるように見事に巻かれた獅子のたてがみは堂々としたものだ。全体は黒くくすんで迫力がある。

「これは彼が若い頃に作ったものですか？ 見事ですね」

全身のやや汚れた様子からその身に受けてきた風雨と経年を想像して、私は言う。ところが村長は首を振った。

「いや、それほど昔に作られたものじゃない。今から十数年前の、石爺が五十を過ぎた頃の、あやつの最高傑作と呼ばれている作品じゃ」

村長は狛形の胴体を肉厚な手の平でぴしゃりと叩いた。

「なにしろこの一對の狛犬は、燃える家のなかで彫られたものじゃ。そのために体のところどころが黒ずんどう。それで古く時代が経ったように見えるんじゃない。この焦げ付きが乙なもんじゃな」

そう村長は言った。「燃える家のなかで彫られた」と言うが、実際にこの狛犬の制作中に、作業場が火事になったことがあったそうなのだ。そのとき石爺さんは、避難もせずに火事の中でひたすらに石を彫り続けていたという逸話がある。そのとき飛び込んだ村人に救出されなかったら、あのまま石爺さんは石像と共に焼けていただろうと村長は言った。燃え落ちる家の打ち壊しによる消火作業が始まって、その中から運び出された狛犬を、また新しく作った作業場に移して石爺さんは彫ることを再開して、今の見事な形に完成させてみせた。その当時の彼は、何かに取り憑かれたような様子で石の中から狛

犬の姿を取り出そうとしていたらしい。

「ちなみにそのとき火事の中から石爺を救出したのがわしの息子じゃ。偉いじゃろう」

「へー」

私の脳裏には、石爺さんの病床の苦しみの表情が浮かんでいた。彼の苦闘は病床だけではなく、ずっと昔から石に向かって続けられていたのだと知った。そうして老人はいま自らの病気に対して最後の闘いをしているのだ。老人の魂を削る創作の一撃をその身に受けながら、老人のことを見守っていた狛犬たち、その未だ見ぬ阿形の姿形を思う。

「村長さん……犯人や狛犬の居場所を、見つけられるなら見つけたほうがいいですかね？」

「もちろん。何を言うとする。村の威信に関わることじゃ。それとも子ども先生は何か知っておるのか？」

「そういうわけじゃなく、もちろん私は何にも知りません。でも、私はきつと見つけてしまうでしょう」

私には、特別な力があつた。その力を使えば、犯人も失くなった狛犬も見つけることは容易いだろう。

私はインダラの力を解き放ち、因陀羅網へと通じる扉を開けた。心の奥にある小部屋が、私の世界を包み込んでいった。

——ここへ来るのは久しぶりだ。感覚器官から受け取る情報はたち消えて、自分の姿も見えないくらいの真暗闇のはずなのだが、成り立ちは夢の世界に近い。——宇宙空間に浮かんでいるような錯覚に遊んでいられた。——私の友達はこの世界を、人を孤独にさせる風穴と評したが、この場所にいれば、私はあらゆる空間のあらゆる時間を覗くことができる。——私にとって、世界は乱反射する鏡に映り込む一つの像に過ぎなかった。

——旧時代の科学へロストテクノロジーの無法な遺伝子操作の結果によって、私は生まれつきにインドラの神の力を具えている。——あまねくすべての生き物や物体が引っかかる網が世界に向かって投げかけられて、その網の結び目に括り付けられている鏡の一つ一つに

は、他の全ての鏡の像が映っている。——私の意識は網となり、鏡となり、世界を一瞬のうちに了解する力が走る。

——私の瞼の裏には『光だけを通す』トンネルが作り出されていた。——別の世界を経由して、私は「この場所」の「過去」の地平の光景へとトンネルを繋げた。——光がトンネルを通過して、私の視界一杯に広がる。——村の神社の前に、阿形の狛犬と吽形の狛犬が一揃い揃っているところが見えた。——それが最後に狛犬が揃っていた日、犯行の現場だった。

——そしてその日境内に現れたのは、石爺さんを最初に発見した村人だった。

結局、阿形の狛犬は山の中から見つかった。口をにかつと開けて瞳は凍りついたように見開いたまま、木々の根本に仰向けに捨てられていた。腹部はハンマーか何かで割られて、その中身は空洞だったから、石爺さんの彫った狛犬であることは明らかだった。私と村長は、容疑者である村人を捕まえて壊れてしまった狛犬の前に立たせていた。私たちは最初彼を疑っているとは告げず、捜索の手を借りたいなどと言って連れて来たのだが、まっすぐに狛犬の場所へと向かっていった私たちに対して、意外にもあっさりと彼は自分が盗んだことを白状した。山のふもとから狛犬を運ぶ荷車の車輪の跡がくつきりと山道に付いていて、ここまで辿り着くのは難しくはなかったというのも自白の理由だっただろう。村長は私の言葉にそれまで半信半疑だったが、村人が罪を認めたことで私の推理（実際には能力の行使しただけなのだが）が正しかったことを認めたのだった。

「……あるとき石爺さんとの会話の中で、狛犬の腹の中に自分の宝物を隠しているって話を聞いちゃったんだ。だから誰にも見つからない夜中に盗み出して、中身を調べてみた。そうしたら聞いた話とは違って中には何もありませんでしたってわけよ」

青年は一度見つかってしまったからは、開き直って犯行の理由を話し始めていた。狛犬の腹の中にあるものを探したかったのだと言った。

「宝物のう。しかし、何故石爺は狛犬の中にそんなものを隠そうと思っただんじやろう」

村人は話を聞いていなかったのかとでも言いたげに悪態をついた。「だから最初からそんなもの無かったんだって、石爺さんの嘘だっただよ村長。石爺さんが語ったのはこうだ。作業場が一度火事になったことはあんたも知ってるだろう？ そのときに石爺さんは自分の一番大切な宝物を迫る火の手から守るために、咄嗟に狛犬の口の中に入れたんだと。その話を俺はまんまと鵜呑みにしちゃったってわけだ」

私は黙って、崩れた阿形の狛犬の姿を見ていた。周りには石塊（いしくれ）がばらばらと落ちている。そのうちの一つを私は拾いあげる。

「狛形の狛犬は、口が開いていない。ぴつたりと口の中がくつついておる。石工は石を彫って行うのだから、くり抜いた跡がなければ空洞も有り得ないというわけか。だからお前は阿形のほうだけを壊したんじやな」

「どこにも穴らしきものも溶接の跡も無かったからな」

村長は犯人の開き直った悪びれない雰囲気逆に吞まれてしまったのか、宝物が見つからなくて残念だという表情を一瞬だけ見せてしまった。

「こんなに重たい狛犬をわざわざ切り出して、荷車に乗せてここまで運んだのは何故ですか？ そこまでの重労働をしなくとも、最初からその場で壊してしまえば良かったのでは？」

私には、そこだけが分からなかった。わざわざ発見される危険を犯して運搬するのも、大変で非効率的だ。そう訊ねたとき、彼は初めて悪いことをしたのを自覚するような、すまなそうな表情を見せたのだった。

「最初はな、台座から狛犬を切り離して、ひっくり返して腹のものを口から出そうとしたんだ。そうしたら中だからからと何か引つかかるような音が聞こえて、こりゃあ確かに入ってるなと思った。だが色々揺り動かしてみたが出てこねえ。だったら仕方ない、壊すしか

なかつたのさ。ただ、神社の前でやったら流石に罰当たり……というか、あそこを遊び場に行っている子供が泣くと思つてね」

ああ、そういうことだったのか。それから彼はこの山奥に遺棄するように、狛犬の腹を捌いた。そうして出てきたのは、がらくたの山だった。

「察しの通り、石ころしか出てこなかつたけどね。俺は昔から好奇心には勝てないのが悪いところだな。まあ、石爺さんの話が嘘だつて分かつたからもういいかな。村の大事なお犬様を壊したのは俺の罪さ、何でも償うぜ」

負け惜しみのように、彼が言った、そのときだった。

「――宝物はちゃんと隠したぞ」

その声に三人が振り返る。山の中、私たちの足跡を辿つてここまで歩いてきたのは、石爺さんその人だった。

「わしの宝物は、狛犬たちがちやあんと持つておる。だからわしは今日この日まで、安心して石造りをやってこれたんじや」

そう言つて、石爺さんはにかつと笑つた。病態を押して、私たちのあとを付いてきたらしかつた。

「――！」

そのとき私には、石爺さんがどれだけ宝物を大切にしていたかが伝わつてきて、胸を打れて何も訊ねることができなかつたのだ。狛犬の腹の中に隠されたものは、あれしかない。

◇ ◇ ◇

「そうですか。親父はそんなことを……」

傍らの布団で石爺さんが眠っている。あれから数日が経過していて、私は薬鞆を持つて家を飛び出してきている。都市から急信を受け取つて急遽帰郷してきた石爺さんの息子である青年と、私は出会つて、話をしていた。彼は、石爺さんが狛犬の中に隠した宝物にまつわる話を私に語つてくれた。

「親父はずつと一途に石に向き合つてきた人だったから。都会に行つてもいつまでも俺の理想の人間でしたよ。あんなにひたむきな人はいないから」

そう言つて彼は笑う。目尻が濡れて光つていた。笑い方が石爺さんに似ていた。

「夢中になつて彫ることが幸せだったらいいんですね。そういうのつて、何だか憧れますよね。都会で働いていると、余計なことを心の奥にしまい大事にして生きることが、どんなに難しいかよくわかります。でも驚いたなあ、まだこんなものを大事にしていたなんて。これなんてまさに余計なものですよね」

渡した小ぶりの石人形を、彼は指で撫でいた。それは阿形の狛犬の腹の中にあつたもので、息子である彼が幼い頃に彫つた初めての石工作品だつた。山の中では周りの石と紛れて、狛犬を打ち壊したあの村人は気づけなかつたが、確かにそれは石爺さんが大切にしていた宝物なのだつた。

もう一つ、私は石爺さんに渡したものがあつた。石爺さんは宝物を持つているのは『狛犬たち』だと言つたが、吽形という石の密室空間の中には、たしかにもう一つ、息子にまつわる彼の宝物が隠されていたのだ。

火事するとき、石爺さんは避難もせず、『阿形』の狛犬の口の中に息子が作つた石人形を入れた。そして『吽形』の狛犬の口の中には、息子から父に宛てた手紙を、彼が子供のときから趣味で書いていた手紙から、都市に行つた息子が定期的に彼に送つていた手紙までを、につかりと引き結ばれた『口の隙間』に投函するように入れていたのだつた。実際に彼が狛犬を彫つていたときには、吽形の狛犬も酒が飲めるように、手紙が入るほどの隙間が開いていた。それはやっぱり一匹が飲めて一匹がお預けというのは可愛そうだから、という思いからだろう。

現在では吽形の狛犬の口は雨水も飲めないくらいにぴつたりと閉じて塞がついて、その姿は神社でも確認している。しかし、阿形の狛犬の腹の中へと入れた石人形が外に出てこれなかつたように、つまりは、『火事による熱膨張で口の隙間が狭くなつてしまったように』、吽形の狛犬の口の隙間も、熱膨張でぴつたりと塞がつてしまったということだつた。

口が塞がつてしまえば、雨水も流れ込まないし、祭の日に御神酒で

腹の中が満たされることもない。それも見越して、石爺さんは手紙を長期的に保存させられると思つたのだろうか。

いやきつと、一心不乱に宝物を託そうとした気持ちに応えて、狛犬が手紙を守ってくれたのだ。私はそう考えたいと思つた。私はそのまま狛犬に手紙を守らせておくかどうか迷つたが、結局はインドラの手紙を使って、吽形の狛犬の腹の中から、手紙を取り出して息子さんに渡そうとした。

「こんなもの、誰がもらつても仕方ないですよ。親父だけの宝物です」
父が目覚めたときに渡して下さいと彼は受け取りを断つた。

「うむう……」

そのとき石爺さんが寝返りを打つた。私たちは少しだけ息を潜めて、笑つた。

それから数日後に、石爺さんは息子に看取られて他界した。私は彼の死に際が苦しいものにならないように、総力を尽くしたつもりだ。その結果かどうかは分からないが、石爺さんは安らかに息を引き取ってくれたと思う。石爺さんの息子は私なんかに向かつて頭を下げてくれた。

「先生。ありがとうございます」

私は驚いてしまつて、頭を下げながらも、恐らくこの場で私が言うべき言葉なんて一つも無く、都会へと戻つていく息子さんをただ見送つた。彼と別れたあと、私は一人で神社へと向かつた。

台座の前で、村長が煙管をくゆらせていた。

「石爺はな、わしと同級生なのだ」

「……そんな風には見えませんでした。村長のほうが若いかと……いや石爺さんも病気になる前は少年みtainな印象だったかも。まあ、意外です」

「相変わらずわしにまつたく興味がなさそうじゃな。まあわしは偉いからな、許してやろう」

村長は言う。

「わしもいつか死ぬのかな」

「お酒を控えれば養生しますよ。医者の方が言うんだから間違いないです。ところで、何をやっているんですか？」

村長は、腹の壊れた阿形の狛犬を咩形とを対にしてまた台座に座り直させて、その腹にパテで何やら塗りつけているらしかった。

「修繕中じゃ。また元通りにして、祭を盛り上げてくれんと」

「ああそんな、工芸品をめっちゃめっちゃにして……」

「難しいな、いつそ腹巻きみたいに樽を巻くか……？ そうじゃ、そうすれば村の観光名物化にもなるな……！ 樽巻き狛犬。キーホルダーも作って、よし、そうと決まれば……」

これは石爺さんに対する冒瀆なのではないかと思っただが、結果的に村が復興すれば良いのかもしれない。芸術が破壊されることには耐え難いものがあつたが、結局私は口を挟まなかった。石爺は怒るだろうか。私達の蛮行を見守って、許してくれるだろうか。どちらにせよ、遺されたものを語り継いでいくのは私達だ。

「ところで狛犬を壊したあの人はどうなったんですか。何か罰を受けたとか……？」

「ああ、あいつか。いやー特に罰さんよ。自宅に謹慎させておる。最初に見つけたのがわしでよかったわい。息子があんなことしたって知れたら今後のわしの信頼が危うい」

「……あ………あんたの息子かい！ このヴァンダリズム親子!!」

と、とうとう思っていたことが口に出てしまった。何というか……真面目に付き合うのが馬鹿らしくて、どっと力が抜けていってしまふ。

「がっはっは。まあ、ここはわしの偉さに免じて、許してくれい」

私は色々なことがどうでもよくなってきた、ぼうっと狛犬を見上げていた。屹立して、体は一部壊れてしまったが、それでもどこか暢気そうに、でんと台座に堂々と座っている。一方は口をあぐりと開け、一方は耳まで引きつって、呵々大笑している。その姿を見ていると、なんだか張り詰めていた緊張が緩んでいって、お腹がむずむずとしてくるのだった。

「ひ、ひひひ、ひ……ひ……ひ……」

んと実験中で忙しいのかもしれない。

私はそのままリビングを横切って自室に向かって、とりあえず減った分の薬を補充することにした。端末にデータを打ち込む。製薬プロセスは自動化が済んでいるから、数時間後には出来ているだろう。そこまで済まずと、私はもう解き放たれた気分になつてベッドの上に倒れ込んでしまった。本棚から一冊の小説に手を伸ばして取る。旧時代の文化のなかで一番好きなのは少女向けの小説だった。活字の媒体は直接想像を刺激してしまうのか、際どいシーンに直面すると、漫画よりも胸がドキドキしてしまう。私はそういうタイプの人だった。今日も私は小説の続きを、寝転がって読み始める。それからもう一つ旧時代で最高な文化が、「お菓子」である。よくもまあ、こんなに多種多様な商品が作れるものだ。人間の情熱と創造性が、あらゆる文化に向かって突き進んで、いちいち体系を生み出しているのだ。人間はどれだけ暇だったのだろうか。基本的な生活水準が満たされたあとにも、こういうことを仕事にしないと生きてゆかれないのが人間なのだ。スナック菓子はなんて軽くて色鮮やかな可愛いデザインで食べやすいんだろう。

「……メ・ガ・ロちゃ〜くん？」

「お母さん!？」

飛び起きた。半透明の私のお母さん、湯川小百合、リイお母さんが、部屋の入り口に立っていた。手首を丸めて、ひゅ〜どろどろと眩く。そういうキャラ付けをお母さんが徹底しているのには私ももう慣れてしまったのだが、実際には幽霊であるわけではなく、ホログラムで投射された映像を肉体として、お母さんの精神が生きているのだった。ちなみに家族以外の人にはリイさんと呼ばせているのが娘ながらに凄いと思う。私は普通に、「お母さん」と呼ぶ。安心して「お母さん」と呼んで良いんだ。

「もうお母さん! ノックしてっついつも言ってるじゃない!」

「したわよくグラフィイトとエポキシの合成アームを遠隔操作してね。誰かさんがお菓子と本に夢中で聞こえてなかっただけで。それよりメガロちゃん、もうすぐご飯の時間よ? そんなもの食べたらま

たお夕飯が食べれなくなっちゃうでしょ?」

「た……食べれるもん」

「食べれなくなっちゃうでしょう?」

「食べれる」

「昨日はどうだったのかしら?」

「うう……」

「ね?」

私は、諦めた。諦めて、お菓子をしまった。どうしても、お母さんには勝てないのだった。

「メガロちゃん、今日はいいこといっぱいあったみたいね」

私のことをじっと見つめて、お母さんが言う。

「いいこと?」

首を傾げた私の隣に、お母さんが座った。

「えくぼ」

そう言ったお母さんに頬を触れられた感じがして、私は指でそこを擦ったのだった。